【 132 】

氏名	藤 原 英 一
学位の種類	医 学 博 士
学位授与番号	博乙第1950号
学位授与の日付	昭和63年9月30日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者（学位規則第5条第2項該当）
学位論文題目	**先天性股関節脱臼の観血的整復術** **ー手術所見および整復障害因子の検討ー**
論文審査委員	教授 折田薫三　教授 寺本 滋　教授 村上宅郎

学位論文内容の要旨

先天股脱の整復障害因子についての研究は多数あるが，因子の捕え方，強調のされ方も種々であり，意見の一致をみていない。

このことをあらためて検討する目的で，昭和48年9月より昭和55年12月までの期間に岡山大学整形外科において，1才以上3才未満で広範囲展開法による観血的整復術を行った先天股脱のうち66例76股を研究対象とした。田辺らの方法で手術を行い，普通写真を使って記録した手術所見ならびに手術記事により整復障害因子について分析し，次の知見をえた。

1）未治療群，既治療群ともに後上部関節包癒着，峡部形成を高頻度に認めた。2）新関節形成，関節内癒着，関節唇後方部の変形，関節唇の高度変形は未治療群に比し既治療群に高頻度であった。3）偽整復群では，関節内癒着，大腿骨頭の明らかな変形，臼底膜様物を高頻度に認め，関節内癒着は広範囲のものが多かった。4）未治療群，既治療群ともに後上部関節包癒着，関節包峡部の reduction に対する障害因子が最大の整復障害となっていた。5）未治療群，既治療群の reposition に対する障害因子では関節唇の内反が最大の因子であり，未治療群では前方部が主に障害となっていた。続いて，未治療群では大腿骨頭靱帯，既治療群では関節内癒着が高頻度の因子であった。6）偽整復群では関節内介在物，特に，関節唇前方部の内反が最大の求心位阻害因子であり，その他の関節内介在物が平均的な比重で因子となっていた。

論文審査の結果の要旨

本研究は，先天性股関節脱臼（先天股脱）に対する田辺式手術ー広範囲展開法による観血的整復手術を受けた66例，76股を対象に，手術時にえられた所見から，8項目にわ

たる整復障害因子を分析している。対象患者が未治療，既治療，偽整復群かにより因子の比重に差はあるものの，いたずらに保存治療に依存することなく，良好なる求心位が得られない場合は，観血的整復術を行う方が予後の良いことを実証している。臨床上，その意義は極めて高く，本研究者は医学博士の学位を得る資格のあることを承認する。